

第2章の注

注1 福島県会津若松市及びその周辺では、若い人の中で、「それでえね、だからあね、…」のような発話が観察された。筆者の知っているもっとも古い例は今から約10年前に小学3年生の女子が使った例である(資料C参照)。現在喜多方市在住の4歳児も使っていることから、若く見積もっても30代の使用者がいるものと推測できるが、詳しい調査はまだ行なわれていない。

注2 杉藤(1983)は「このような類型的な口調(いわゆる「尻上がり」*筆者注)は、東京アクセントの平板化の傾向及び、句末、文末の、または強調等のイントネーションの不安定さと無関係ではないだろう。また、日本語のイントネーションが、無意味と思われがちな助詞に託すところの多いことを示している。」と述べている。

注3 新生児のカテゴリ知覚能力の発現過程を探るため、Eimas 他(1971)によって用いられた方法である、HAS(High-amplitude sucking procedure、新生児に乳首を吸わせてその吸引の程度の変化を測定することで、聴覚刺激に対する反応の変化を調べる方法)によって、Mehler 他(1988)はこれらの新生児が母語と非母語の弁別知覚能力を有することを確認した。

注4 母語である英語をノルウェー語よりも長い時間、聞いていたということである。聞いている時間の長さの違いを、刺激言語の違い(この場合は被験者の母語である英語と非母語であるオランダ語)によるものだとする仮定に基づく。

注5 ただし、長年にわたって規範とされてきた「NHKのアナウンサー」のような話し方は、世代を超えて「正しい」、「模範的な」話し方だと考えられているようである。しかし、そのように考えられてはいても、実際、まったく原稿のない談話で、フィラーも挿入せず、イントネーションにも変化をつけずに、「アナウンサーのような話し方」ができる人は、アナウンサーでもごく少数だろうと考えられる。したがって、ここではそのような「話調」については言及しなかった。